

「令和7年度 幼児教育研修会」報告書

- 【期 日】 令和8年1月22日(木)
【会 場】 ロイヤルチェスター佐賀
【主 催】 佐賀県保育会
【参加人数】 111名 (集合 70名 オンライン 41名)
【内 容】 研修1 12:30~16:30



「生まれてきてくれてありがとうって子どもに伝えたいあなたのために」
講師 星山 麻木(ほしやま あさぎ)氏
(明星大学 教育学部 教育学科 教授)



○グループワーク(4~5人) 紙の渡し方、受け取り方(どのような配慮が必要か)

- 1, 普通に渡す
- 2, 優しい気持ち → ゆっくり。相手の手の上に置く。
- 3, 目を閉じる → 他の人が声をかける。場所の指示。
- 4, 全員目を閉じる → 渡す前に指示を出す。
- 5, 広い場所に移動していろいろな事にチャレンジする。

※ どうして楽しかったのか? → 評価されない。みんな違うことを考えている。それでいい。失敗、成功とかどうでもいい。子どもの主体性は安心してチャレンジする。失敗しても「ナイス チャレンジ」と声かけをする。

- ・「あ〜あ」はダメ
- ・不安の経験をさせない。
- ・安心して失敗をしていい。という環境を作る

○絵本「かなわね」 大橋美沙

筆者が高校生の時に、小学3年生の頃の自分（LD）の体験を絵本にした。

読み聞かせのなかで「かなちゃん」の気持ちを考え、かなちゃんの困り感を考え、どんな関わりがいいのかを分かりやすく伝えられた。

例えば、かなちゃんは、漢字の練習を2時間練習しても20点しか取れない。（かがみ文字）

→保育所で分かること（靴が左右反対・方向がわからない・道具箱がわからない・踊り（左右）がわからない）

- ・特に低気圧の時は歪んで見える。知識として知っておくとよい。
- ・本人は生まれつきなので気付かないことが多いので、見え方が違うことを保護者に伝えることで親も動いてくれる。
- ・見えにくい色、見えやすい色がある。（コントラストが大事）
- ・人間の脳の機能はそれぞれ違う。本人のせいではない。育て方のせいでもない。脳の個性、特性という。
- ・多様であることは豊かで素敵な事。私たち人間だから全員違う。
- ・算数かけざん かなちゃんは1の段2の段がやっと
- ・頭の中と違うことが口からでる
- ・音楽の時間は苦痛

→協調運動→左右指を動かすことが難しい（リコーダー・鍵盤ハーモニカ・大縄跳び）

協調運動生活全体（靴・服・食事・はさみ・クレヨン）

○絵本「虹色なこどもたち」 星山麻木/著 相澤るつ子/イラスト

「グレーゾーンってよく聞きますよね。グレーな子どもなんていない。ブラックな子どももない。だから、ホワイトなわけでもない。一人ひとりを尊重することで自分らしく輝きながら生きていくことにつなげていきましょう。」と言われ、子ども達を色にわけてそれぞれの特性を事例と交えて話される。

レッドくん（規則性・完璧を好む・ヒーロータイプ）

- ・セーフスペースがあったらいいなあ
- ・「すごいね」と誉める。
- ・回ると落ち着く（発散タイプ）
- ・幼少児より支援を受けると小学校に上がるまでに落ち着く

グリーンくん（内向的・不登校率 No1）

- ・予告すると良い・切り替えができない-集中力がすごい
- ・ルーティーンワークが良い
- ・感覚過敏

アクアちゃん（エルサタイプ・ギフトッド・感じやすく疲れやすいタイプ）

- ・人でいたいと気持ちを尊重

オレンジちゃん（のび太君）

- ・失敗を防ぐ方法を考える。

イエローちゃん（ジャイアン・野生児なので自然にかえす・長いものが好き→ブンブン振り回す）

ブルーちゃん（純粹・優しい・ピュア）

パープルちゃん（愛着障害・親子関係に傷つきやすい・独占欲）

親も同じようなタイプ-親のケアが必要-寂しい子が多い

ピリピリしている。甘える-子どもの話を聞く（役を与える-「助かったよ。ありがとう」-担任は一人で抱え込まない。複数で対応する。

○ふつうとは？

WISCIII—認知しか分からない

100→ふつう（誰が決めたのか？大人）→普通の幅を広げる

出来る所（いい所を探す） できない所（できるようにはならないので合理的配慮が必要）の差が激しい子。

星山先生は、子どもに「ふつうってなに？」と聞かれ「ポケモンに例えると、ノーマルとレアキャラがいるとして、君はレアキャラの進化系なんだよ」答えられたとのこと。

○16：00～質疑応答

- ・診断は受けた方がいいのか？

Drと出会っておくことが自分の味方を増やすこと。

- ・療育とは

親に安心感を持たせること。一緒に感動すること。

- ・パニックを起こす子ども

「残念だったね。いやだったね」と一緒に共感する。

理由を探す。予防する。

【感想】

先生の講演を聞き、困り感を持つ子どもに対して、自分、または保育園全体での関わり方はどうか？と考えることができました。今日の研修の内容の事を一つでも園全体で共有して子どもの困り感に気づき助け、できること良いところを伸ばせるような、たくさん魔法の言葉を伝えていきたい。

毎日頑張って子育てしている保護者の気持ちに寄り添い、悩みを安心して話せる保育士に。そして、『親に花束を渡せる』保育士になりたいです。（文責：永林寺保育園 中山陽子）